

語り継ぐ魂

わかやまスポーツ伝承館

1949年全米水泳選手権で圧倒的な速さを見せつけた日本選手団を手厚くもてなし、くれたお札にと、フレッド・和田勇夫妻は昭和26年、日本水泳連盟に招待されて35年ぶりに来日。連盟の田畑政治会長と会談しました。

そのとき、「東京でオリンピックを開催するのが私の夢なんです」と話したという田畑会長は、1932年ロサンゼルス五輪、1936年ベルリン五輪で水泳総監督などを務め、日本選手団のメダル獲得に大きく貢献。1940年東京五輪でも中心的役割を果たさずでしたが、戦争の激化で開催返上となり、誰よりも東京での五輪開催を願っていた人物でした。田畑会長の胸の内を聞き、米国に戻った和田。7年後の昭和33年に再来日したとき、

国際オリンピック委員会（IOC）委員を伴った田畑会長が和田のもとを訪ねてきました。

「1964年、東京でオリンピックを開きたいんです。ご協力をお願いします」。和田は7年前にも聞いたこの言葉に胸を打たれ、日本が国際的に飛躍するきっかけとして五輪招致に協力する決心をしました。

しかし、国が費用を出してくれるわけでもなく、全ての交渉にかかる旅費、接待費などは和田家の私費払い。それでも、祖国日本に対する愛情と一度と決めたら引き下らない性格から和田は腹をくくり、妻を説得。五輪開催の票を集めるため、旅に出ました。敗戦後の東京が開催地に

フレッド・和田勇②

東京五輪招致に東奔西走

選ばれる可能性はかなり低く、協力してくれる国があるかどうかかわからない、ゼロからのスタートでした。

「東京でオリンピックを開けば日本は大きく飛躍し、日本人に勇気と自信を持たせることができる。それが私に与えられた使命、責務だ」という思いを胸に、南米10カ国を巡る長旅。夫妻はメキシコに飛びましたが、当時のメキシコは五輪招致に名乗りを上げたデトロイトのある米国から

経済援助を受けていたことから、交渉は難航しました。

何度も足を運んだ度重なる折衝によって、戦後復興にかける情熱と努力する日本の状況が米国支配から脱しようとしているメキシコに似ていることから、次期五輪に立候補をを目指すメキシコを応援することを条件に、東京開催に投票してくれるよう約束を取り付けました。その後、中南米諸国を歴訪する2人の活躍ぶりは各国のマスコミにも取り

上げられました。

東京開催に手応えを感じた2人が米ロサンゼルスに戻ったのは、出発から38日後。マネジャー任せにしていた自分の事業に専念しよう。そう思った矢先、田畑会長から「中南米のIOC委員に念を押すため、今度は投票会場である西ドイツ（現ドイツ）のミュンヘンに行ってください」と緊急の依頼がありました。「彼らが日本を裏切るはずはない」と答えたものの、田畑の執拗な言葉にうなずかざるを得ませんでした。

そして投票当日。会場の外で待つ和田のもとへ日本スタッフが駆け寄ってきました。

「和田さんのおかげだ。本当にありがとう」。東京は2位以下を大きく引き離して過半数の34票を獲得し、大逆転勝利。日本の新聞は一斉に東京五輪決定を一面で伝えました。

（わかやまスポーツ伝承館 事務局長 畔取由佳）

◇ 次回は31日付で掲載予定です。



1964年の東京五輪開会式に出席するため来日したフレッド・和田勇夫妻（わかやまスポーツ伝承館提供）